

長岡開府400年

vol.1

ROOTS

400

越後
長岡

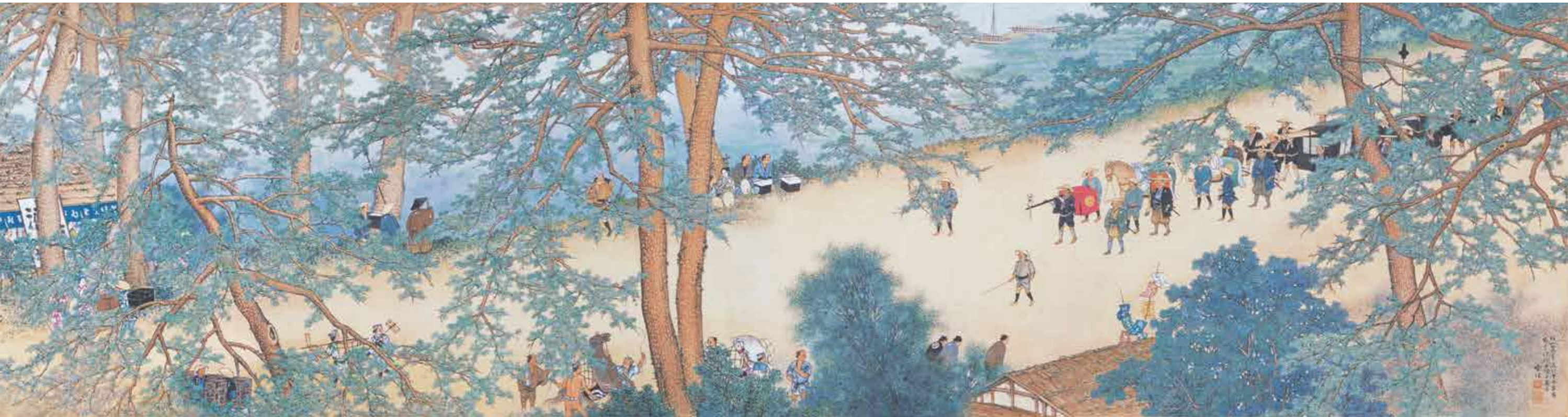
常在戦場

<特集>

牧野忠成の
生き様

戦国武将 長岡藩祖
初代藩主





水島爾保布筆「街道往来屏風 大名行列」(サイズ92.6×348.0 cm)

水島爾保布(みずしまにほぶ、1884～1958)は東京生まれ。東京美術学校日本画科卒業や朝日新聞記者の経歴を生かし挿絵画家として有名になる。大正12、3年頃長岡の雪景に魅了されて、戦後、長岡に移住し、長岡の歴史、風物をテーマにし、多くの名画を残した。この「街道往来屏風大名行列」は、長岡藩の参勤交代図を模したものではないが、三国街道の榎峠や鉄坂を通過する長岡藩の行列を想像させる。領主の牧野氏とその家臣団、付随してきた民衆は三国街道を通過して越後長岡に入ってきた。爾保布は松樹の美しさを見事に表現し、大自然のなかに生きる人びとや歴史の息吹きを感じさせてくれる。

巻頭言

摩擦が人類の文明を発達させてきたとすれば、戦いを常に意識することは大切だ。

戦いに備え、平和を考える

決して、戦いに至ってはならないとする

倫理を持ち、人びとの幸福とは何かを考える。

作家・火坂雅志が、徳川家康とその家臣団を描いた

歴史小説に「常在戦場」と名付けている。

それは戦国武将牧野忠成とその家臣団の魂の綱領でもあった。

火坂雅志の遺作『真田三代』にも

何も戦場働きだけが功名をあげるチャンスではないという

「常在戦場の精神」がでてくる。

牧野忠成が整備した城下町長岡が

二年後の平成三十年に開府四百年を迎える。

長岡はたびたびの戦禍や天災に襲われても

不死鳥のようによみがえってきた。

復興を果たしてきた人びとの魂に

常在戦場の精神がある。

今、ここに、その心を学び、生き残る思想を再び実践しようと思う。

温故知新であり、ルネサンスでもある。

越後長岡藩の文化、伝統によって

このまちの未来を照らし出したいと思う。

そのために、地方創生の理念を掲げる長岡市は

みずからの歴史をあえてこの小誌で紹介したいと考えた。

以下、その第一号である。

越後長岡 ROOTS 400 編集会議



表紙・甲冑「赤坊主」(または「赤防主」という)

「赤坊主」(あかぼうず)は、広島城主49万8千石の大名福島正則配下の精鋭20騎が着用した甲冑と伝えられている。常に先陣をつとめ、戦場を駆け抜けるといふ正則の戦法を象徴する存在である。正則は、元和5年(1619)に広島城の無断修築を問われて、信州川中島に配流。改易を伝える使者をつとめた義兄牧野忠成に武器一切を託したといわれる。「赤坊主」は、長岡藩から分知された与板藩主牧野家が転封されるにともなって小諸へ移動。現存するのは、この一領のみである。小諸市教育委員会所蔵。

真田戦法と常在戦場

上田合戦刈田働きの図
(イメージ図)



慶長五年（一六〇〇）の旧暦、秋八月、徳川秀忠率いる徳川軍三万八千人は、信州上田城に籠る真田昌幸・信繁を総攻撃。

のらりくらりの真田ゲリラ戦法。業をにやした若武者牧野忠成が、上田城周辺の美田の稲穂を刈り取る「刈田働き」の挙に出た。

従う手勢は六百余名。若武者の挙動をとめる者、従う者はおおわらわ

その挙を上田城の兵はせっかく稔らせた稲穂をば刈り取りさせずと

どっと城門を開いて迎撃したり。これには智将の真田信繁も思わぬ誤算に

ついに落城を迫りたりと大思案。そこに徳川軍の軍師本多正信と

大久保忠隣など「牧野忠成、軍令違反ぞ」と撤退を命令。

やむなく牧野らは引き揚げた。これを軍師が責めて、牧野忠成の

郎党（家来）の旗奉行の処罰を求めた。牧野と同じく刈田働きをした

大久保忠政は旗奉行の杉浦平太夫を切腹させたが

牧野忠成は拒否し、家来を逃亡させみずから、戦場を出奔

父の康成は吾妻砦に幽閉された。生きていればこそ

汚名を晴らすことができると常在戦場の精神を発揮した。

天晴れ勇士なり。

※出奔：逃げ出してあとをくらませること

徳川秀忠（一五七九～一六三三）

江戸幕府二代将軍。家康の三男。家康とともに関ヶ原の戦い（不参）、大坂の陣に参戦。幕府創業の組織強化

など功があった。角川書店『日本史辞典』

真田昌幸（一五四五～一六〇九）

信州上田城主。関ヶ原の戦いでは、二男信繁（幸村）とともに豊臣方で秀忠の西上を阻止。長男信之は徳川方。

真田信繁（一五六七～一六一五）

幸村ともいう。父とともに上田城で秀忠軍を阻止。戦後、高野山麓に幽居したが、豊臣秀頼の挙兵で大坂入城。夏の陣で戦死。

刈田働き

戦場となった田畑の穂などを刈り取る作戦をいう。「徳川禁令」のひとつで、農民の難儀を考慮し、禁止していた。

上田城

長野県上田市。千曲川をのぞむ平城。天正十二年（一五八四）真田昌幸が完成。翌年の徳川方との合戦を第一次、慶長五年を第二次上田合戦と俗にいう。

本多正信（一五三六～一六一六）

徳川家康の最高の謀臣。家康の政治的・軍事的判断は、正信の献策であるといわれている。家康が駿府に移る慶長十二年以後、秀忠の執政となる。

大久保忠隣（一五五三～一六一八）

徳川家康の近習。秀忠擁立後、その老中となる。人望が厚かったが、本多正信と対立した。

牧野康成（一五五五～一六〇九）

上野国大胡二万石領主。父の成定は牧野氏が三河牛久保城主であった永祿八年（一五六五）、今川氏から徳川氏に従属した。

山の彼方では
関ヶ原決戦が迫っていた。

北斗七星

狼煙の花火

大太夫

徳川秀忠

大久保忠隣

神原康政

本多正信

真田昌幸

上田城

真田信繁

牧野忠成

牧野勢

牧野忠成の決断

出奔した時の牧野忠成の言葉が残っている。

「勇士を誅することがあっては、これから粉骨忠節を尽すものがなくなるであろう。郎党(家来)が主君のために生命を捨てることは珍しくないが、自分は郎党のために生命を捨てる。」

と言いつつ出奔している。言葉を意識すると「いわれなき罪で、家来を罰することがあれば、今後、一所懸命に主君(殿様)のために仕事をしてくれる家来はいなくなってしまう。また、家来が主君のために、生命を投げ出してくれることは、戦国時代では珍しいことではないが、主君である私は、家来のために、生命を投げ出す覚悟を持っている」

牧野忠成は、御家断絶の覚悟で出奔した。その後、秀忠軍三万八千人は上田城を攻めあぐねて、結局落城させることができなかった。
慶長五年(一六〇〇)の九月十五日、関ヶ原において天下分け目の大いさが開かれたが、徳川方の主力であった徳川秀忠を主将とする三万八千人の参戦は間

にあわなかった。
徳川譜代の家臣、榊原康政・酒井家次・大久保忠隣をはじめとする平岩・石川・松平・菅沼といった創業の功臣は、徳川家の存亡を決する戦いに参加できなかったのである。

その結果、徳川方で関ヶ原の戦いで活躍した武将は、本来、豊臣方につくべき諸將、たとえば福島正則らの勇將が大活躍する。小早川秀秋の裏切りがなければ徳川家康の勝利はおぼつかなかった。
まさに薄氷を踏む思いで徳川家康は勝利した。家康の三男、徳川秀忠は父から叱責されたというが、結局、二代將軍の地位についた。

牧野忠成は間もなく許されて帰参がかない、大坂冬の陣、夏の陣に参戦している。

もしかすると、秀忠軍が関ヶ原の戦いに間に合い、徳川方が楽勝していれば、豊臣恩顧の戦国武将、たとえば福島正則らの改易はなかったかもしれない。

牧野忠成は天正九年(一五八二)に三河国牛久保(愛知県豊川市)で、牧野康成の長男として生まれた。父康成は牛久保城三千石の領主だったというが、大胡二万石の領主となった。忠成は越後長峰五万石を経て、元和四年(一六一八)に、越後長岡城主となった。同六年には七万四千石の領主となった。戦国期から平和期へ移行する時代に、よく家臣団をまとめ、良政をしいて、長岡藩二百五十年の礎を築いた。要は家臣を大切にしたらこそ、小藩が生き残れたのである。

上田城
関ヶ原の戦い以後、真田信之、仙石忠政、宝永3年(1706)以後は松平氏が入封。幕末に至る。現在の三層櫓は仙石氏が築城。

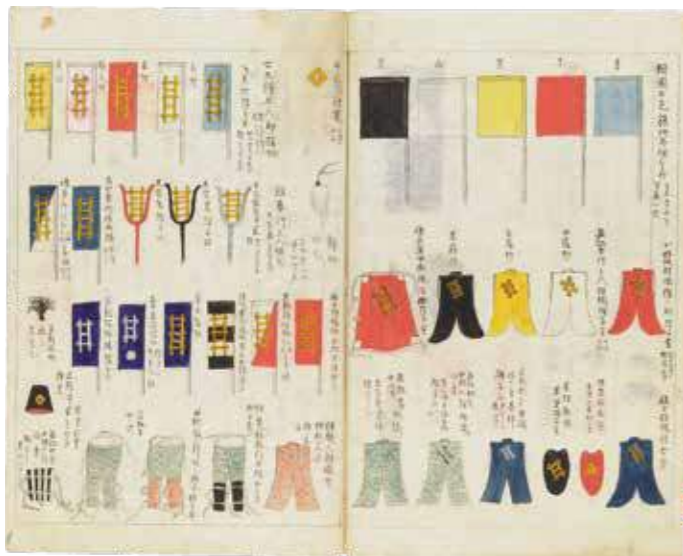
現代に生かせる常在戦場の精神

由旧録
宝暦十年(一七六〇)に家老山本老迂斎(義方)の依頼を受け藩儒高野余慶が編纂した。



御邑古風談
明和四年(一七六七)に高野栄軒の伝聞をもとに藩儒高野余慶によって編纂された長岡藩主と家臣の勲功や行跡などの記録。由旧録の姉妹編ともいえる。

懐旧雑誌
明治十二年(一八七九)に旧長岡藩士 小川当知が旧長岡藩の組織や行政を調べて編集した冊子。古き良き武士の時代を懐かしみ、後世にその事実を残そうとした。



常在戦場の精神は現代生活に通ずるものがある。越後長岡では、人材活用の基本に、常在戦場の心得を第一に唱えたし、または剛健な生活、合理的思考を養うために、武士(侍)、農民、商人や子どもや女性にも、この精神を浸透させている。
それは創意工夫が始まって、進取の気象を養うことになり、新奇な文明にあこがれを抱かせることにつながった。たとえば幕末の長岡藩財政を改革した河井継之助は、最新の奇銃砲(機関砲)を導入した。

また、戦場の生活を予測して、平素から質素節約を励行し、ともに心身の鍛錬をして、教養を向上させた。そのことは幕末に長岡藩が苦難に陥った際、小林虎三郎の米百俵の故事をうみ、人材の発掘につながった。

そういった訓えは、江戸の中期、儒学者の高野余慶などが、藩の家老山本老迂斎と「由旧録」や「御邑古風談」にまとめて、藩士間で武士の教養とした。また武士には「諸士法制」、農民には「郷中守書」、商人・職人には「町中掟」を公布して、おのおのの分限に応じて努力することを奮起させている。
そのいくつかの例を「御邑古風談」から紹介してみよう。

根本を忘れることのないよう

長岡藩の儒学者高野余慶が著わした

『御邑古風談』に「根本を忘れぬように」というくだりがある。因みに高野余慶は、のちの日本海軍の山本五十六の祖先にあたる。その余慶が「人は枝葉瑣末にとらわれ、根本を忘れることがある。根本を忘れないように」という戒めを紹介している。

これは長岡藩伝統の訓えでもある「侍の恥辱十七か条」の一つだが、藩士間で、議論・意見が白熱してくると、主宰者から「根本を忘れぬように」と叱責されたという。

武士の本形を大切に

やはり、『御邑古風談』にある話だが「古代の士(三河在住時代の牧野家の家臣)」は、「武士の本形を忘れぬを以て、第一と心掛け」という。武士の本形とは、甲冑を着て、太刀をはき、弓を携えた姿だという。武士たる者、威儀をもって武士の正装で戦いにのぞむことが大切だという。甲冑は重く武張ったものだが、我身を守るものである。それに甲冑は切目、折目があって、野放図にデザインされたものではない。

武士の本形をあらわし、決して大言壮語で戦いに臨むものではないことを教えてくれる。甲冑の甲を通して、人の節操を守ることを武士の本形という。礼儀、態度、服装が正しければ、常在戦場の境地に至っているといえるであろう。



飯島文常筆「雪中勢揃之図」(部分)

藩絵師飯島文常の描く牧野軍団勢揃の図。全長岡藩兵の役割がわかる極秘の絵図。中央の雪壇に牧野公。九耀の旗は小馬標(こうまじるし)である。軍旗や陣羽織、袖には五間梯子の藩印がつけられていたが、絵色の違いが極秘のため省略されている。背景は二の丸。松樹が多いのは戦時に松明などにするためといわれている。

不可能を可能にする常在戦場の精神 牧野軍団 人材活用術

長岡藩は七万四千余の分限には、すぎた(過大な)家臣団を抱えていた。それに、軍事は五組と二組の遊撃隊に編成され、各組とも多種多様な技能者を集め、総合戦力の向上につとめていた。その総合訓練の様子が『雪中勢揃之図』に描かれている。これは毎年酷寒の二月に、城内馬場を中心に全藩士が集まって、先祖代々から伝わる武器を着用し、おのれの戦場での役割をあらかじめ確認しようというものであった。中央の雪壇に藩主が着座し閱兵した。軍旗をたて、鼓を鳴らして行進した。特徴は藩主の後方に、軍師や智者が控え、また各組の連絡役が多数おり戦術の変更を臨機応変にさせていたことだろう。

長岡藩の軍法は、あくまで戦略的な見地にたつて、戦いをすすめることであり、無駄な戦力投入を避け、戦いによるダメージを最少にするようにつとめることを目標とした。そのため、戦いのための準備は、周到にすすめることも、戦時の勤苦をかたときも忘れないようにした。また、戦術は多種多様、小藩なるがゆえに奇襲戦も考慮し、小部隊が大部隊を攻める戦法を、常に作戦の念頭に置いた。また、戦いは不可能を可能にしなければならぬとした。常在戦場の精神が勝利に結びつくものと信じた。「常在戦場の四字」は、平素の合言葉であり、兵士たちの覚悟の意志であった。

女性を増やせ

常在戦場は、ふだん生活のなかでも、非常時に備えることを基本としていた。そこで、牧野忠成の治政から、歴代藩主は時代に即応したさまざまな法制をつくり、勵行させている。

たとえば、牧野忠成の初入部(初めて領国にくること)は寛永七年(一六三〇)の三月であった。早速、領内の村々を巡って、庶民のくらしぶりを視

察することになった。

〈そのときの牧野忠成の言葉〉
「この村は女性が多い。豊かな村である。女性を大切にしろ」(従来、米の生産高で豊かかどうかを評価していたが、女性・子どもの数が多いか少ないかで貧富を判断した。すなわち、各代官に、人口の増加こそが、藩を豊かにするものだとおしえた)

侍(武士)、商人、農民の生活規範

侍には諸士法制、商人(町人)には町中掟、農民には郷中守書を制定して、人びとの生活のなかに合理的な実利思想を優先させた。その規則に「常在戦場のこと」が記され、商人、農民も武士と同じように生活するよう求められた。すなわち武士と同様にみずから人としての誇りを持つことを教えた。

生活規範の一例

侍は、人のうえに立つことを自覚し、祖先以来の伝統を嗣ぐことを教養とした。

老人を敬い、家の代々の名を嗣ぐべき襲名を、老人の生前中はなるべくそのままとして、当主は幼名を使った。たとえば幕末家老となった河井継之助は家督相続しても、父代右衛門が存命だったのでそのまま通称名を使った。

食事例

長岡藩では、上方(関西)と同じように夕食に、飯を炊くことを通例とした。これは夕食の残り飯を夜間の非常時に備えることであり、朝食は雑炊にして食べ、平素から粗食に耐えることとした。ただし、老人には健康を考慮して白飯白粥を供し、その老練な知恵の活用をはかった。

商人対策

町中の通りに面して、同業同種の商売の店舗を構えさせ、互いに競って商売に励むよう心掛けさせた。また店舗を嗣ぐべき惣領が凡庸の場合、番頭や手代を簪にし、娘と結婚させて店をゆずるようにした。そのため、半分以上、養子が家の主人となった町内もあった。

城下町には貸家が多く、領内の余剰人口を吸収し、商工業の振興につとめた。

農民対策

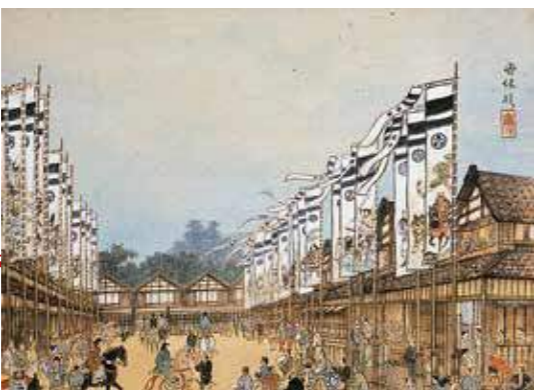
とかく村役人(庄屋・組頭・横目)が傲慢富裕となることを防ぐため、庄屋株の転売を推奨した。

そのため、庄屋など村役人は、村決めなどを頻繁に開き、農民の意見を聴くとともに、村務に励んだ。

新田開発では割地制度を設け、大地主(当時土地制度はなかったが)が生まれないようにした。

教育対策

有用であろうと思われる学問はどしどし取り入れた。学統にとられず、幕末になると洋学を学ぶものも多く出た。これは多種多芸に秀でた人材を育成することにより、戦場や平素の生活での牧野軍団の人材活用につながることを目的としていた。



水島爾保布筆
「昔の長岡十二ヶ月の中 五月 端午節句市中中職」
五月五日の節句は、町中に乗馬した侍たちが駆けめぐる風習があった。それを町人たちが二階屋や道端で大声をあげて落馬させる。落馬した侍は日頃の鍛錬不足を恥じたという。

そのたくましが250年に及ぶ長岡藩政の礎を築く

牧野忠成のエピソード

上田合戦での刈田働きや出奔の逸話のほかにも、牧野忠成には、その人物像をうかがい知ることができる数多くのエピソードが残されている。

福島正則改易事件

江戸幕府の成立時の懸案は、豊臣氏恩顧の大名たちが数多く残っていたことであつた。特に広島四十九万八千石福島正則は、徳川家にとって、きわめて危険な大名であつた。そこで、その取り潰しをはかった人物が牧野忠成であつた。忠成は、徳川家の養女となつた妹の昌泉院を正則の継室に入れ、広島城、無断改築の事実を探らせた。昌泉院は見事に改築を調べあげて実兄に報告。その後、正則との間に生まれた二人の娘をのこし、広島城を脱出している。幕府は広島藩の取り潰しを決定し、その通告を牧野忠成に命じている。正使となつた忠成は副使の花房正成とともに江戸愛宕下の広島藩邸に向かった。その際、正則は昌泉院との間に生れた女子二人を、一人を手ひき、一人を抱きあげて命を聴いたという。「今は詮なき事」（仕方のないこと）が正則の一言であつた。幕府は、その態度が神妙だつたという報告を聴き、あらためて川中島四万五千石を福島正則に与えられた。その際、福島邸と牧野邸は隣り合わせであつたので、堀越しに福島家伝来の戦團集団が着用する「赤坊主」の鎧二十領が投げ込まれた。

遺産は金貨で五万三千両余り

牧野忠成は、承応三年（一六五四）十二月、七十四歳で没した。その際遺産が金貨で五万三千両余もあつた。実に長岡藩政一年分に相当する金額である。その金貨は遺言もあつて、すべて忠成の側室、子女、仕えた老女、親類の妻たちに分けるよう遺言があつた。分けられた子どものうち幼いものは二十年にわたつて、また世話をしてくれた手伝いの女性にも分けられている。男性に分けなかつたのは「自分で稼げ」といふたつたらしい。



普濟寺（長岡市栖吉町）の裏山にある牧野忠成と殉死者の五輪塔（長岡市指定文化財）

死後、領内鎮護を目的に、領内の高い栖吉の山頂に、みずからの墓をつく

らせている。ところが、忠成の墓は山形の湯殿山にもあり、当時幕府の実力者春日局の信仰にあやかつて牧野氏の安泰を狙つたもの。死後もなかなかしたたかである。

牧野忠成の妻たち

忠成は始め徳川氏の有力者松平家忠の娘を妻に迎えている。ところが徳川氏の領土拡大により、三河吉良荘の吉良氏を懐柔することになつた。そこで、牧野忠成の正室となつていた家忠の娘を一旦徳川氏の養女にし、吉良上野介に嫁がせている。そこで継室永原氏（田中吉政の家老）の娘を入れていく。側室は数知れずもうけて、家族をふやすことで牧野氏繁栄の基礎をきずいた。

牧野秀成怪死事件

忠成には実の弟に主水秀成という人物があつた。弟は実戦には疎かつたが、領国経営には才を発揮した。そのために藩内家臣に文治派と武断派の対立が起きた。そこで忠成は秀成を領内の寺院に逼塞させて、ひそかに暗殺した。藩内はその肅清のすさまじさをみて安泰となつた。

そこに牧野氏のしたたかな生き様がある 徳川十七将図の謎

世に徳川十六将は有名であるが、十七将はない。ところが、藩主牧野家には『徳川十七将図』が伝わっている。
武田二十四将、上杉三十八将などと戦国大名は、股肱の家臣を名將に数えて紹介しているが、いずれも偶数の将士である。
因みに長岡藩主牧野家に伝来した「徳川十七将図」は端麗精緻な絵画で、現在長岡市の指定文化財になっている。牧野氏を紹介する際、徳川家譜代の恩顧の大

名として「門地と才幹とは深く徳川氏の信頼を買い、東北の重鎮たるべく異数の加増を得て、越後の中枢たる長岡の地に封ぜられし者」と説明されている。徳川十六将という点、①松平康忠②酒井忠次③井伊直政④本多忠勝⑤榊原康政⑥平岩親吉⑦大久保忠世⑧鳥居元忠⑨渡辺守綱⑩内藤正成⑪高木清秀⑫鳥居忠広⑬服部正成⑭大久保忠佐⑮米津常春⑯峰屋貞次の十六人である。牧野忠成の父、

牧野康成は入っていない。ところが、絵の上段に徳川家康がいて、上から三段目の真ん中に牧野忠成の父、康成が描かれている。描いた御用絵師は狩野秀信。狩野秀信と称する絵師は何人かいるが、『徳川十七将図』を描いた秀信は狩野氏信の長男で、正徳二年（一七二二）に六十六歳で没している。元禄の頃に描かれたと仮定すると、戦国大名牧野家が、いかに徳

川家と親密な関係があつたかを証明する資料である。そもそも、牧野家は三河牛久保城主のとき、永禄八年（一五六五）に、徳川家（当時は松平姓）に従属している。いわば東三河郷といわれる平岩、奥平、西郷氏などと一緒に徳川氏に属した新参譜代大名であつた。その新参が「徳川十七将」の一将を自負するところに、牧野氏のたくましい生き様が感じられる絵画である。

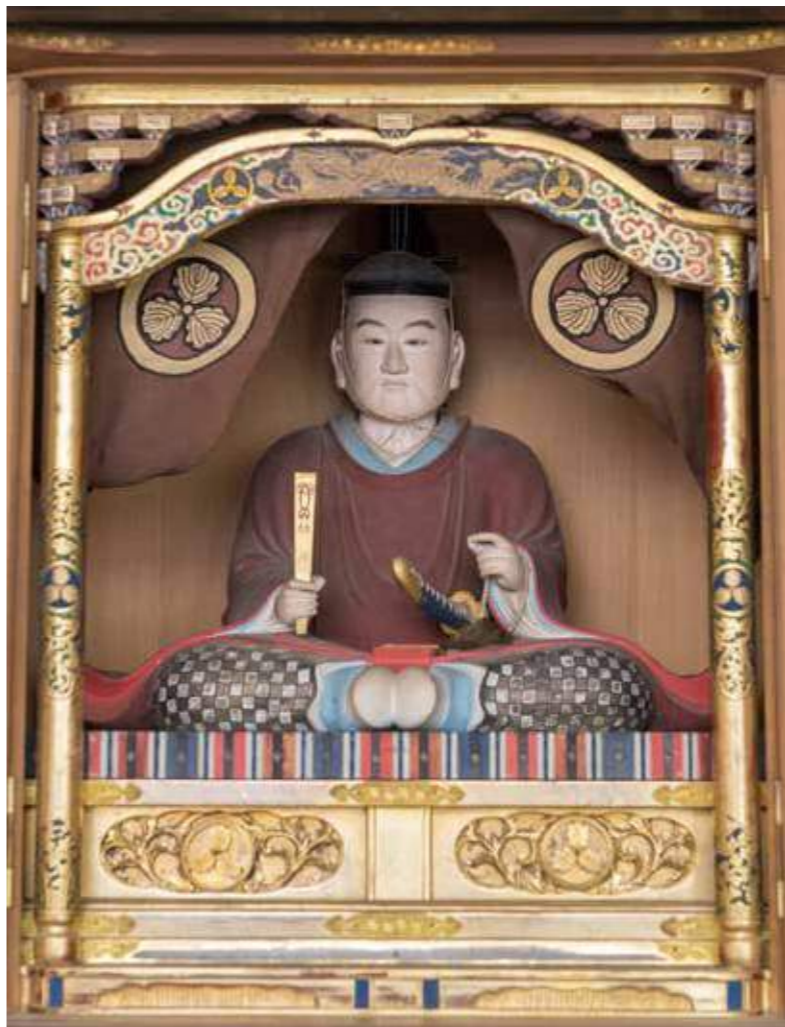


長岡藩主牧野家に伝来した「徳川十七将図」



牧野康成

幕府の最高職を三代にわたり輩出した譜代大名 牧野氏と長岡



牧野忠成木像
忠成の人となりについて『牧野家譜』では、世が平穩になったからこそ「さらに陣法を改め、兵器を調うことが大切」であるとしている。「当家、創業の成就も、一にここに定る。世に良將と称するは忠成なり」と称賛している。

牧野氏の歴史



牧野家第十七代当主
牧野 忠昌氏

牧野の祖は、第八代孝元天皇のひ孫武内宿禰の第四子平群木菟宿禰である。

初めは田口姓を称し、その祖は阿波民部少輔田口重能とされる。重能は阿波国の豪族として大きな勢力を持ち、源平合戦時には平家方に付いたが、やがて源氏に味方し、後に讃岐国に移り住んだとされる。

その後、応永年間（一三九四～一四一八）に四代將軍足利義持の命により讃岐国から三河国宝飯郡牧野村（現在の豊川市牧野町）に移住して牧野姓を名乗り牧野城を築いた。

戦国時代の牧野は今川氏や松平氏などの間でしぶとく生き残った一族である。この時代に培われた「常在戦場」の精神は後の長岡藩の藩訓となっている。

徳川家に付いた後、上野大胡城、越後長峰城を経て、元和四年越後長岡城主となった牧野忠成を初代と数え、十二代忠訓まで移封される事無く譜代大名長岡藩牧野家は続いた。

その間、幕府の最高職である老中を、九代忠精、十代忠雅、十一代忠恭と三代続けて輩出している。

長岡藩主牧野家史料館

長岡は、ほぼ江戸時代の始めから終わりまで、譜代大名牧野家が治めた全国的にもめずらしい地域である。移封による藩主の交代が多かった地域とは異なり、「殿様」といえば、ほとんどの市民が「牧野家」と答える。「牧野家」・「長岡藩」をキーワードとして地域の歴史を探索することは、広く江戸時代の長岡の歴史・文化を訪ねることにはかならない。

この史料館は平成二十六年、長岡の近代教育の曙、国漢学校開校の日になみ、六月十五日に開館した。展示の目玉は、「長岡城復元模型」と「長岡城本丸御殿殿様御座所床の間の復元」である。長岡が城下町であったこと、参州牛久保時代にうまれた牧野家の定紋「丸に三つ柏」の由来などを分かり易く展示。さまざまな分野で活躍した個人的な長岡の先人たちが、どのような歴史、文化、精神性をルーツとしてうまれたのか。探索のヒントが豊富にある。



長岡藩主 牧野家史料館
開館時間／AM9:00～PM5:00
休館日／毎月第1・第3月曜日（祝日等の場合は翌日）
12月28日～翌年1月4日
所在地／長岡市幸町2丁目1番1号 さいわいプラザ3階
電話／0258-32-0546

長岡市ってどんなまち？

長岡市は新潟県の中央に位置し、日本一の大河・信濃川が市内中央をゆったりと流れ、東に守門岳、西に日本海を望む、「山・川・海」に囲まれた自然豊かな人口二十八万人のまちです。

東京から、上越新幹線で約九〇分、関越自動車道で約一五〇分など、首都圏に短時間でアクセスできます。

過去、戊辰戦争や第二次世界大戦、中越大地震などの幾多の災禍に遭いながら、長岡の人とまちは、「米百俵」の精神で立ち上がってきました。

毎年八月に開催される「長岡まつり大花火大会」は、長岡空襲からの復興を起源とし、慰霊と平和への願いを込めて打ち上げられている花火大会です。現在では二日間約一〇〇万人もの観覧者を集め、花火を通じて世界に平和のメッセージを届けています。

長岡開府四百年と地方創生

「長岡」の文字が、古文書に初めて登場するのは、慶長十年（一六〇五）だといわれています。それから約四百年、私たちのふるさととは、大きく変貌を遂げました。

一方で、日本有数の降雪量を誇る気候風土のもと、数々の天災や二度の戦禍の経験などを通じて育まれた長岡人の精神風土は、現代も変わらずに受け継がれています。

そのなかでも、長岡を二百五十年の長きにわたり治めた牧野氏がこの地に伝えた伝統や文化、質実剛健の土風が、今もまちや市民の暮らしに強く息づいていることを実感します。

「知る」ということは「愛する」ことだといわれます。地方都市「長岡」が将来にわたり輝き続けるために、私たちの礎



長岡市シティホールプラザアオーレ長岡
所在地／長岡市大手通1丁目4番地10
電話／0258-35-1122



空から見た長岡市／長岡藩7万4千石の城下町として栄えた長岡のまち。
写真右手に見えるJR長岡駅がちょうど本丸跡にあたる。



長岡まつり大花火大会／毎年8月2日・3日に開催。
名物正三尺玉や復興祈願花火フェニックスなど2日間で2万発のバラエティーに富んだ大型花火が咲き乱れる。

開府四百年のあゆみ

いまからおよそ百年前、市民協働で開府三百年を祝う催しがあった



祭典中の市内の様子/
市内の町や村は競うように町内を飾りつけ、門をつくるなど工夫をこらした。仮装して行列しながら市中を踊り歩く仁和賀(にわか)や、山車(だし)が三百年祭の雰囲気盛り上げた。



遺物展覧会/
阪之上小学校を会場に歴代藩主や旧藩士に関する展示品の数々を陳列。福島正則から牧野忠成に渡された甲冑「赤坊主」も小諸から借用して里帰り展示された。



祭文を読む河島市長/
記念会の会場において河島良温市長が長岡開府三百年記念会長として祭文朗読を行い、長岡が今日あるのは牧野家の三百年間の治績のおかげであると述べた。



長岡停車場通りの様子(現在の長岡駅前付近)/
市中の装飾でひととき大きかったのは長岡停車場前に建設されたお城の門を模した装飾門であった。

長岡開府三百年祭

元和四年(一六一八)に牧野家が長岡藩主となって三百年目にあたる大正六年(一九一七)の五月二十日から五月二十九日まで開催された。主催者は、長岡開府三百年祭記念会(総裁は子爵牧野忠篤、会長は長岡市長河島良温)。会期初日の祭典に始まり、遺物展覧会、新潟県郡市連合物産共進会、飛行大会など、市内各所で様々な催しが行われた。北越戊辰戦争から四十八年目、長岡空襲の二十八年前。官民一体、市民協働で盛り上げる長岡開府三百年祭は、時代を回顧・展望し、近代都市長岡の力量を全国に情報発信する一大行事であった。

千也がゆく!

かずや

KAZUYA REPORTS

長岡藩
ゆかりの地を
巡る探訪記

第1回

憩石に腰をおろして 感じる小諸

長岡から車で走ること二時間。空は青々として浅間山は雄大にそびえていて歓迎してくれているかのようだ。今回、私が訪れたのは長岡藩とゆかりが深く、第二次上田攻めの徳川軍布陣の城として使われた長野県の小諸城。まず、目に入るのは「三の門」と門上に掲げられた扁額「懐古園」の文字、扁額は十六代徳川宗家当主徳川家達の筆によるものだ。その横にひっそり



慶長5年(1600)徳川本陣は上田攻略のため、小諸城を本陣にした。その際秀忠公御床几石と伝えられている石に座る石丸千也。

と石があるじゃないか?! 近くに行くくと第二次上田合戦の時に陣を敷いた秀忠が腰掛けたという「憩石」とその石碑があった。貴重な石なので私は秀忠になつたつもりでその憩石で一休み。門先には微古館があり、なかには牧野康哉公着用具足や徳川秀忠の書状、また、福島正則精鋭部隊の甲冑「赤坊主」など小諸藩ゆかりの品を展示してあり、興奮覚めやらぬまま先に進んだ。その先には私が小諸城で一番魅力と思った、とてつもないスケールの空堀と歴史を感じる石垣があった。



「草笛」のくるみおはぎは、くるみの潰した時の油ときな粉がもち米に絡んで絶妙な味で、必ずお土産に買いたい一品。



小諸城址「懐古園」(写真は園内の「微古館」)
開園時間/AM8:30 ~ PM5:00
休園日/毎週水曜日(11月~3月の間)、年末年始
所在地/長野県小諸市丁311
電話/0267-22-0296

空堀は浅間山の噴火でできた天然の要害で、登れば崩れる地層、数十メートルの高さの斜面で敵陣もさすがに攻めようがない城だったのである。また、初代藩主仙石秀久が築いた本丸跡の石垣は、四百年前のまま。見る角度によって、いろいろな表情を見せてくれる、おススメの撮影スポットだ。

最後に展望台から見る千曲川と四季折々の山の表情は、最高のビューポイントなので行く価値あり。

さらに、小諸城周辺で美味しいものに出会った。お昼に食べた「草笛」のくるみおはぎと「丁子庵」のくるみそばは、くるみの香りと旨味が広がり、喉が鳴るほどうまかった。小諸は奥深い街である。では次号もお楽しみに!

石丸 千也(いしまる かずや)
長岡で美容室を経営し、自らもスタイリストとして活躍中。長岡の歴史を通して郷土を考え、次世代に伝えたい、と熱き想いを持った若者が集う「越後RYO-MA 倶楽部」の局長。「米百俵まつり」で坂本龍馬に扮している。



長岡市内の料亭かも川本館の桜飯。河井ファンの熱いリクエストで再現した。白米に鉛色の味噌漬けた大根が鮮やか。



桜飯は感謝の食事

昭和六年（一九三二）刊行の今泉鐸次郎『河井継之助傳』に、こんな一節がある。

「味噌漬飯（大根の味噌漬を細に切り、飯に炊き込みたるものにして、長岡藩中には之を桜飯と稱せり）は継之助の好愛せしもの」

山中村（現柏崎市高柳町、

当時は長岡藩領）の庄屋石塚

家は、「山中村騒動」で郡奉行河井継之助の裁断によって

一家が救われた恩を末代まで

忘れぬようにと、事態が収拾

した十一月十五日になると毎年欠かさず継之助の肖像と遺

墨の軸を掛け、「河井様の好物」で

ある桜飯を供えたという。

現代でも桜飯は

味わえる。江戸の昔

から人びとの身近に

ある大根の味噌漬

けを刻み、白飯に混

ぜるか炊き込めば出

来上がり。一口頬張

るごとに、質素でい

て滋味豊かな、長岡

藩の食を堪能できる

ことだろう。

五間梯子の藩印は牧野家の仕法

（政治姿勢）



いかにして「五間梯子」が

長岡藩の藩印となったのか。

それには、次のような言い伝えがある。

牧野家が三河（愛知県豊川

市）にあった戦国時代、敵に追

われた牧野の殿様は、ある領

民の納屋に身を潜めた。する

と領民は機転を利かせ、何事

もなかったかのように、梯子を

納屋の戸に掛けておいた。追

手はこれに騙され、殿様は危

うく難を逃れることができた。

殿様を突き出せば、領民は褒

美に与ることができたのに、

そうしなかったのは、牧野家

が常から領民たちを思い、領

地を治めていたためだという。

殿様はこのいきさつを胸に、

一層領民たちを大事にする決

意で、藩印を「五間梯子」と

したと伝えられている。

藩主領民一体の気風は、牧

野家と共に長岡にも伝わり、

幕末に至るまで藩を大いに盛

り立てた。



イラスト・峠夏美

ROOTS
400 越後長岡

長岡開府400年という節目の年を契機に我々の住む地域の歴史や文化のルーツを見つめ直そう

平成30年は長岡開府400年

発行／長岡市 平成28年5月1日
長岡開府400年記念事業実行委員会 平成30年3月20日 第3刷
編集／越後長岡ROOTS400編集会議 代表／稲川 明雄
〒940-8501 新潟県長岡市大手通1-4-10（開府400年記念事業準備室内）
Tel.0258-39-2395 Fax.0258-39-2272
E-mail: kaifu400@city.nagaoka.lg.jp
制作／株式会社ネオス
協力／蒼柴神社、普濟寺、すなっく馬の骨、小諸市、懐古神社